



SSHS 図書館だより



2022.06.01

2022年 6月

月	火	水	木	金	土	日
6	7	1	2	3	4	5
13	14	8	9	10	11	12
20	21	15	16	17	18	19
27	28	22	23	24	25	26

6 月水無月

今年は沖縄が本土に復帰してから50周年。沖縄に関する本を紹介します。



アンマーとぼくら/有川ひろ

『ぼくたちを見かけなかった？—なんて訊けるはずないじゃないか。よく考えろ。』

主人公のリョウは母の予定に付き合う約束で沖縄に里帰りした。そこで不思議な体験をする。



首里の馬/高山羽根子

『早く答える必要がない、ようは競争をしない1対1のクイズには、対話があり、心の交流が生まれます。』

未名子の仕事は、定められた時間、遠方にある登録された解答者にクイズを読み、答えさせること。

若い頃から民俗学を長く研究していた学者だった順さんの私的な資料を保存しておく場所であった「沖縄及島嶼資料館」のお手伝いもしていた。

ある日未名子の家の小さな庭にいっぱい、大きな一匹の生き物らしき毛の塊がうずくまっていたのを見つけた。その頃から、未名子の感情や生活に変化が起き始める。



海をあげる/上間陽子

『悲しみのようなものはたぶん、生きているかぎり消えない。それでもだいぶ小さな傷になって私になじみ、私はひとの言葉を聞くことを仕事にした。』

沖縄に暮らしている筆者。自身の家族への思いと風俗に関わる若者へのインタビューが掲載されている。

沖縄の眩しく素敵な観光地だけではない面を知ることができる一冊。



フォントの話 その1

『図書館から発行する資料は“メイリオ”にして欲しい。』

ある都立高校の司書の先生から要望を頂いた。

なぜ“メイリオ”というフォントなのか。

“高い可読性を目標”に作られたフォントだからだ。

参照：伝わるデザインの基本/高橋祐磨

永	明朝体	永	ゴシック体
	可読性が高い		視認性が高い
	疲れにくい/目立ちにくい		疲れやすい/目立つ
	長い文(本文)に最適		短文や見出しに最適

“バリアフリー図書”という種別の本がある。

ある出版社では「10ポイントの明朝体」で通常の単行本は作成されている。

それを「22ポイントのゴシック体」に老眼用、弱視の子ども用の単行本は作り変えている。

このように出版側もフォントを意識しているようだ。

近年出版社は独自のフォントを開発する事に力を入れて、特許を取るなど企業努力をしているとのこと。

何気なく見ている出版物は「どのフォントが適しているのか」実は考えられている。

「何となく読みやすいな」と感じる文章があったら、“筆者の文章力”+“フォントの効果”かもしれない。